200822002B

厚生労働科学研究費補助金

子ども家庭総合研究事業

乳幼児健診をきっかけとした発達障害の早期発見支援活動とその評価に関する研究

平成１８－２０年度　総合研究報告書

研究代表者　　加藤則子

平成２１年（２００９）年３月

厚生労働科学研究費補助金
子ども家庭総合研究事業

目　次

総合研究報告書
乳幼児健診をきっかけとした発達障害の早期発見支援活動とその評価に関する研究・・・・・ 1
研究代表者　加藤 則子

研究成果・別刷・・103

平成１８−２０年度　厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
総合研究報告書

乳幼児健診をきっかけとした
発達障害の早期発見支援活動とその評価に関する研究

研究代表者　　加藤　則子　　国立保健医療科学院　生涯保健部長

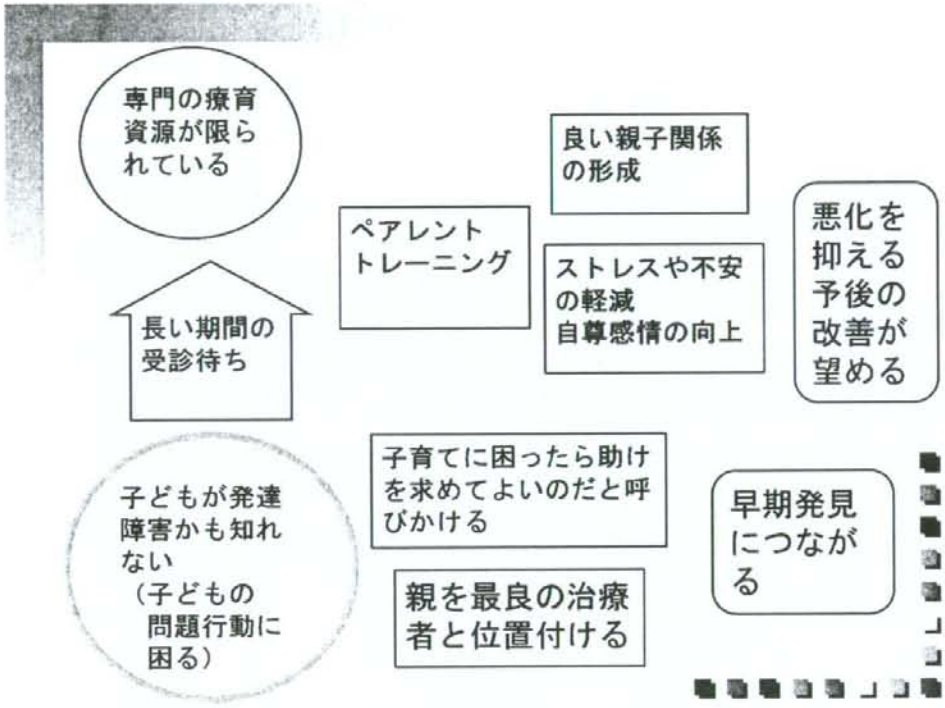
研究要旨

子どもを育てにくい社会環境の中で、家族への支援の必要性が高まっている。オーストラリアで 20 年前に開発された「前向き子育てプログラム」（トリプルＰ）が日本の家族にも有効であるかどうかを検証するために、首都圏近郊に在住し子育て講座の受講を希望した親 45 名（5 種の介入群）に８週間にわたる介入プログラムを行い、介入を行わなかった 2 群と比較した。その結果、介入群で子育て場面での振るまい、子どもの問題行動と親の抑うつ・不安・ストレスに有意な改善が見られた。これにより「前向き子育てプログラム」が日本の家族にも有効であることがわかった。

＜分担研究者＞
柳川敏彦　和歌山県立医科大学保健看護学部教授
＜研究協力者＞
瀧本秀美　国立保健医療科学院生涯保健部母子保健室長

A．研究目的

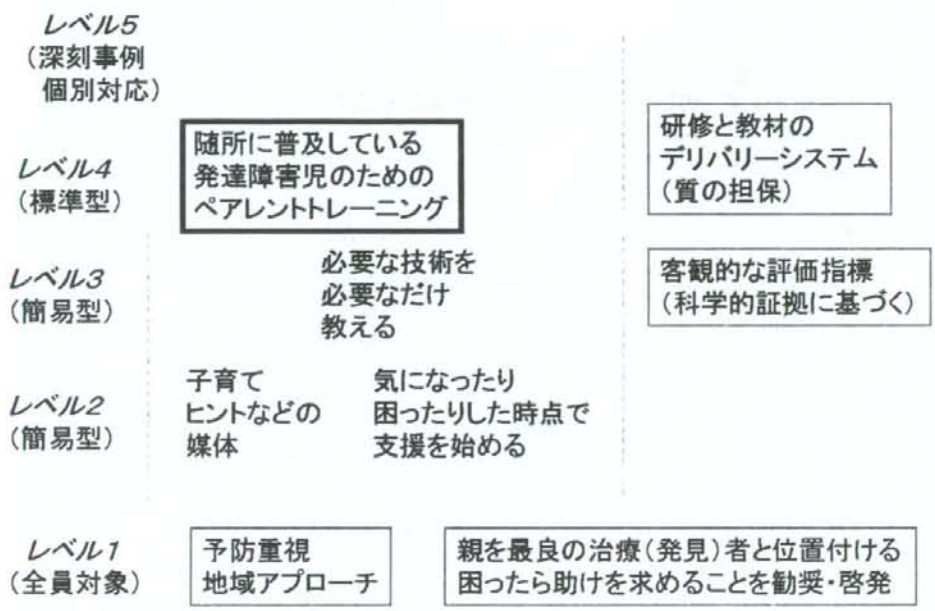
1．発達障害早期発見支援に親介入が重要であるわけ



発達障害児は仮にその素因を持って生まれたにしても、養育の関わりによって、比較的良い経過を取ったり、逆に悪化が速くなったりする。子どもの行動が少し気になっている親や、子どもの行動に困っている親に、早くから子どもとの適切な関わり方を身につけてもらうことで、専門的な療育機関や医療機関の受診までの間の状況を良好なものに持って行けるし、すでに医療機関にかかっている場合でも、経過を良くして行くことが出来る。

2. トリプルPシステムは、親子・家族支援に有効である

トリプルPシステムの特徴

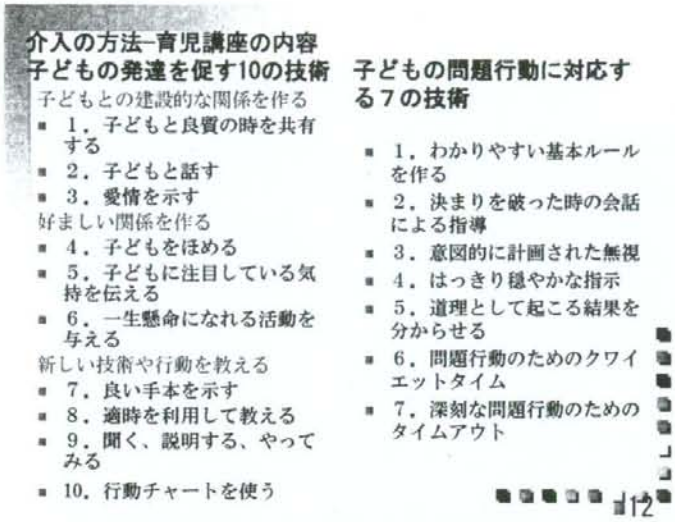


発達障害をはじめとした子どものメンタルヘルスサポートプログラムの一つに、オーストラリアで20年前に開発されたトリプルP（Positive Parenting Program、前向き子育てプログラム）がある。認知行動理論に基づいたペアレントトレーニングの一つである。8週間にわたる標準的なセッションは多くのペアレントトレーニングと共通であるが、標準化された尺度による客観的な効果判定が出来ることと、人材育成や教材提供において質が担保されていること、そして、予防を視点に置いた地域アプローチを目指していることに特徴がある。健全で前向きな親支援をめざし、支援を受けることに決して引け目を感じさせないで介入に持って行こうとしている。親を最良の発見者であり治療者であると位置付けているからである。

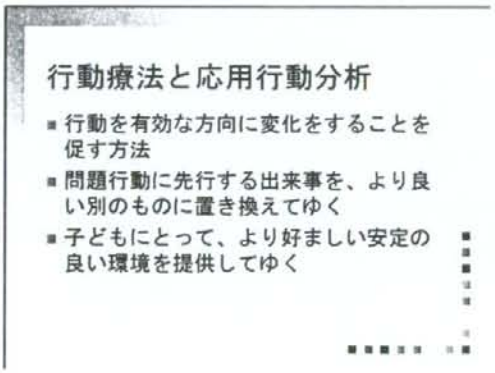
3. トリプルPの論理背景

1)認知行動学的論理背景

トリプル P の主要な特徴の一つは行動療法の手法であり、それは、「17 の子育て技術」に表されている。



これは、応用行動分析の考え方に従っており、良い行動を促し、問題行動を起こしにくい背景を作ることを目指す。



これについては、発達障害児の支援のために多く普及しているペアレントトレーニングとほぼ共通であるが、トリプル P システムには、このほかにも加味されている理論の軸がある。これが、認知理論である。

認知療法的接近　―　行動変容にとどまらない接近視点

社会情報処理モデル

親の認知の仕方の癖

- 帰因性（例：わざとやっている、私のせい）
- 期待（例：もっと、もっと）
- 信条（例：そういう時期なんだから）
- 特に、「帰因性」に関しては、子どもの行動を解釈する上で、よりよい別の考え方をしてみるように、親を励ましてゆく点が重要となる

親自身や、子どもに対する不適切な思い込みの代わりに、より建設的な考えができるように支援することである。

トリプル P は主にこの二つの社会科学関係の理論を軸としているが、その大きな背景として「社会学習モデル」を従えている。

社会学習モデル

- トリプルPは社会学習理論に基づいている
- 親子は互いに双方向に影響しあう
- 子どもが反社会的な行動を作り出すのに、どのような学習メカニズムが働いているのかを明らかにしている
- それが理解できれば、罰則的な子育てに代わる、「前向きに」子どもとかかわる技術が、どのようなものであるかが分かる

プログラムで問題行動の起こるわけを保護者は学ぶが、これらは、社会学習モデルに基づいている。

問題行動の原因

- 間違ってりえるほうび
- あいまいなメッセージ
- エスカレートの罠
- 好ましい行動の無視
- 人の行動をまねる
- 感情的なメッセージ
- 効果のない脅し方
- 一貫性のないしつけ
- 帰因的な考え（例：わざとやっている、私のせい－わたしは悪い親）
- 親の関係、精神状態、ストレス
- 遺伝的な感情や行動の傾向
- 指示のしかた
  - 多すぎる
  - 少なすぎる
  - 難しすぎる
  - タイミングが悪い
  - あいまい
  - 質問形式
  - 遠距離から

さらに、トリプルＰでは、認知行動療法の枠組みにとどまらず、子育て力を伸ばすこと自体に焦点を当て、いくつかの提案をしている。まず、子育ての要点は、日常生活の中にこそ発見されるという視点である。

日常的な子育ての中に、
情緒行動問題の解決の糸口がある

- 社会性や知能の育成は、早期に、ごく日常的な親子の関わりの中に始まりが見られる
- 行動や情緒の上での深刻な問題は、情緒的に守られている環境の中で、言葉や、社会性や、発達課題、問題解決技術を教えていく中で、軽減されてゆく

さらに、子育て力を伸ばすために、自己統制の過程を親に生じさせようとする。

親の子育ての力を伸ばす

自己統制：self-regulation …中心課題

- 多様な状況の中で目標に向かってゆく活動
- 適切な手段や方法で、思考、感情、行動、注意を調節していくことを意味する
- 自己統制のメカニズムは、物事が予想外に動いて行った時に発動する
- 子どもや自分自身に適切な目標を設定すること、実行状況を把握すること、どの程度できたかをとらえること、それらをもとに次の目標を設定すること
- 言い換えれば、子ども自身の自己統制の能力を伸ばすことでもある

これらの行動変容等をより容易にするための環境を設定してゆくためのことがらとして、前向き子育ての五原則をサンダース教授は提案している。これについても、単なる行動理論にとどまらず、包括的に家族を支援していくという視点に立っていることが伺われよう。

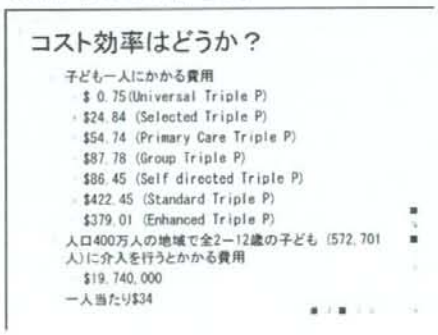
トリプルＰの五原則

- 安全で活動的な環境作り
- 前向きに学ぶ環境作り
- 自信を持ってしつける
- 現実的な期待感を持つ
- 親としての自分を大切にする

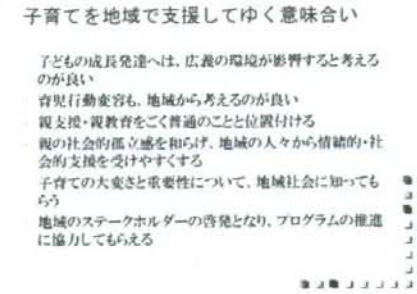
2)地域ベースの接近に関する理論的背景

トリプル P は5段階から成る地域アプローチをモデルとしている。重症度に合わせて、適切な介入をして行くことが、家族のためでもあり、コストの効率にもなるという考えである。

実際、有効に働いた場合、地域全体でのコストは、こども一人当たり 34 豪ドルであり、安く上がる戦略と言える。



家族支援には、公衆衛生的発想や視野が重要である。

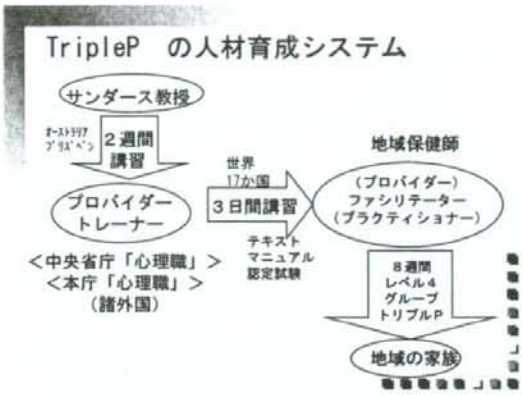


3)結果が客観的に確かめられる

効果を示すためのメンタルヘルス指標が設定されている。これらを介入前と後にアンケート調査する。グループトリプル P の前後で見ても良いし、地域全体の介入の場合は、すべての子どもの親に対して調査しても良い。

4)地域で正確に効果をもたらすためのシステム

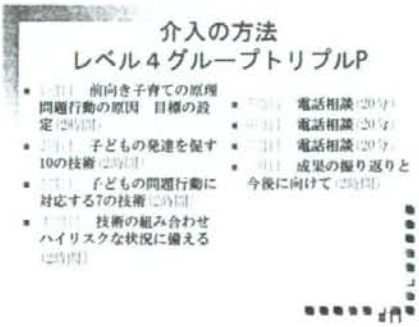
トリプル P システムを地域全体に浸透させ効果を望んでゆくためには、介入内容の質の水準を確保してゆかなければならない。そのためには、介入内容や教材が規格化されていなければならず、人材育成の方法やそのための教材も規格化されている必要がある。
研修システムは厳格に設定されており、地域の家族にサービスを行う人（プロバイダー、プラクティショナー、あるいはファシリテーターと呼ばれる）は、トレーナーと呼ばれる養成指導者から研修を受ける。この研修の実施は、ブリズベンにある事務局によって厳重に管理されている。トレーナーは、心理の専門知識を持ちサンダース教授からの講義を直接理解できる英語力を必要とする。トレーナーは日々教授内容のアップデートの知らせを受け、教授内容の質が確保されている。
レベル４グループトリプル P を例にとって、人材育成のスキームを示す。



地域にトリプル P システムを投入してゆくためには、人材を地域から育ててゆかなければならない。たとえば、多く行われているペアレントトレーニングの場合、特定の専門性に立った数少ない専門家のみにそれができるものであり、需要に追いついていないのが現状である。レベル４グループトリプル P の場合、そのグループワークを進めるために必要な技術は、規格化された養成講座によって学ぶことができる。グループワークを進めるにあたってのマニュアルも完備されている。地域で数年間の現場経験を踏んだ保健師や、子育て支援活動を続けている NPO の方々が、３日間のトレーニングを受けることによって、有効なグループワークを運営してゆくことができる。規格化したトレーニングとマニュアルによって、このグループワークの内容が担保される。このようにして、人材を現地で確保してメンタルヘルスを浸透させるやり方は、プライマリヘルスケアの基本にのっとっている。

一方で、トレーナーの資格を持つ人は極めて限られる。これが、トリプル P システムにおける質の確保の根本である。養成講座はそう易々と開けるものではない。内容が曲がって伝わらないために払われている細心の注意である。トリプル P はその価値ゆえに、普及に一定の歯止めがあるのである。

レベル４グループトリプル P の子育て講座のカリキュラムは、以下の８週間である。



親用の教材はワークブックと、講座の際に見せるDVDである。
指導者養成コースのカリキュラムと認定試験の内容は以下のとおりである。

レベル４グループトリプルＰ指導者養成コース

第１日１期
問題行動とその有効な介入
第１日２期
グループトリプルＰの計画と実行
第１日３期
１週目（ポジティブな子育てとは何か）への導入
第１日４期
１週目のまとめ方と２週目（子どもの発達を促す10の方法）への導入

レベル４グループトリプルＰ指導者養成コース

第２日１期
２週目（子どもの発達を促す10の方法）の続き
第２日２期
３週目（子どもの問題行動に対応する７つの方法）の続き
第２日３期
しつけのルーティン等についてのロールプレイの体験
第２日４期
育児ストラテジーの応用

レベル４グループトリプルＰ指導者養成コース

第３日１期
ファシリテーター実習
第３日２期
グループで起こりうる問題とその対応
第３日３期
電話セッションによるフィードバック
第３日４期
８週目まとめのセッション、認定試験について

レベル４グループトリプルＰ指導者養成コース

認定試験

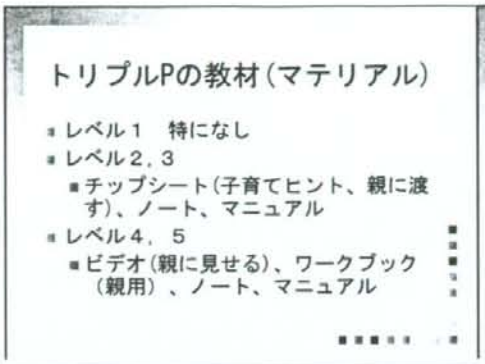
ペーパーテスト　５０問
パフォーマンス
しつけのルーティン（必須）
電話セッション（必須）
好ましい行動を促す
アスク・セイ・ドゥ
当然の報いとしての結果
会話による指導

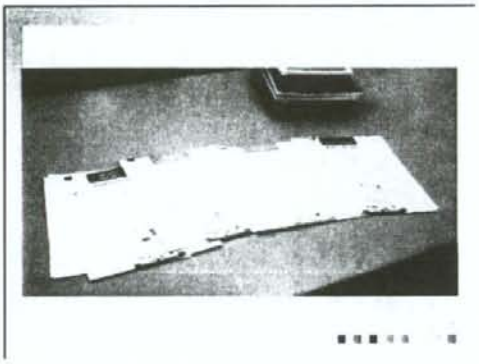
講師用のマニュアルの柱立ては、以下のようになっている。300ページに近い大部であるので、８週間にわたるグループワークを行うにあたって必要な情報のほとんどが盛り込まれている。

ファシリテーターマニュアル
（全２６２頁）

第１部　トリプルＰについての解説
第２部　プログラムのコーディネーション
グループの設定、実践の準備
評価法（質問紙）、実践上起こる問題
第３部　グループセッションの概要
セッション１からセッション８まで

レベル４グループトリプルＰのみを見てきたが、トリプルＰシステム全体として提供されている教材マテリアル類は以下のようである。





トリプル P システムの特徴のもう一つは、教材媒体のひとつであるチップシートと呼ばれる子育てヒントのしおりである。それぞれが A4 で 2 ページから 3 ページ、いろいろな問題に関して、それがなぜ起こるか、どのような対処の方法がありうるのかが説明されており、使う人が自分の目標を定めて、解決策を探りながら取り組むことが出来る。チップシートはレベル 2 とレベル 3 の介入において用いられる。和訳されたものは以下のとおりである。

トリプルPチップシート（子育てヒントのしおり）
和訳完了分リスト

前向き子育て	親になること
	パートナーを支える
	ストレスに対処する
	家庭の安全
	産後のうつ
	仕事と家庭のバランス

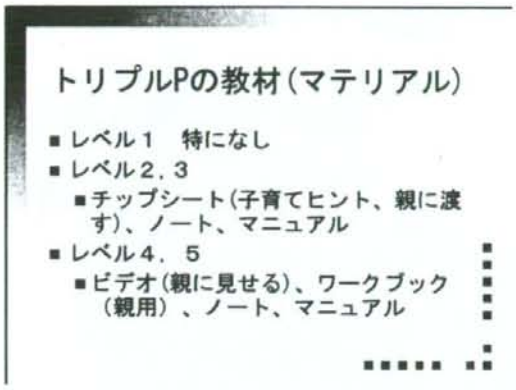
乳児	泣く
	子どもの発達を促す
	分離不安・人見知り

幼児	トイレトレーニング
	かんしゃく
	言うことを聞かない Ⅰ
	歩き始めたら
	言葉の発達
	ぐずる
	自分で食べる

園児	言うことを聞かない Ⅱ
	けんかや攻撃的態度

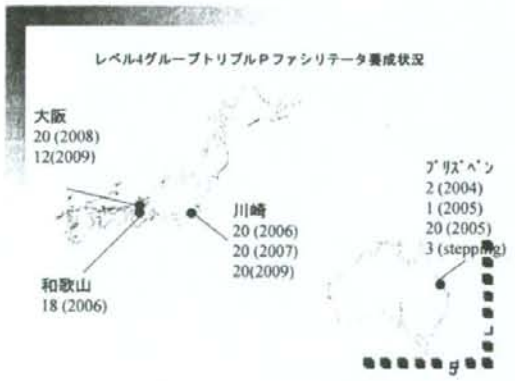
小学生	スポーツ
	いじめにあったら
	ADHD
	創造力を伸ばす

これらを含め、トリプルＰで用いられるマテリアルを総合的に示すと以下の通りになる。



4．トリプルＰの日本における広がり

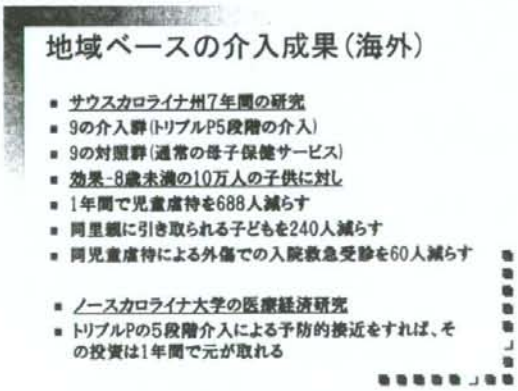
トリプル Ｐ は、限定された地域に必要にして充分なだけの浸透がある時もっとも効果を表す。ある地域にどの程度浸透したかは重要であるが、日本国内でどの程度トリプル Ｐ が取り組まれているかという議論は、さしたる意味を持たない。効果の把握があいまいとなるからである。それでもなお、参考データとしてわが国においてどの程度トリプル Ｐ が取り組まれているかを示しておくことは、実態把握をする上で意味があることであろう。
ファシリテーターの養成状況は以下のとおりである。



レベル４グループトリプル Ｐ の実施状況は以下のごとくである。

5. 諸外国での研究成果

日本ではいまだに地域に丸ごと介入していったような実績はないが、諸外国では貴重な研究成果が上がっている。米国サウスカロライナ州の研究は、１０億円かけて７年間で行われた。



このほか、英国の国家家族精神保健プログラムでは、クリニカルレベルの問題行動が 22%減少してことが分かっており、それまで最大の効果を示した喫煙防止の国家プログラムが7%減の効果であったのに対し、格段の差で有効であったことが示されている。

Sanders、M. R.と Printz　R. J.(2005)

トリプル P システム：

子どもたちの行動と感情的な問題の取り扱いとその予防のための複数のレベルからなる、証拠に基づいた、地域アプローチ。

レジスター報告、31、42-45。

トリプルシステム　マシュー・R・サンダース博士

ロナルド J. Prinz 博士

子どもたちの行動と情緒の問題の取り扱いとその予防のための複数のレベルからなる、証拠に基づいた、地域アプローチ。

ここでは子育て介入のトリプル P-前向き子育てプログラムシステムの、正当性、必要性、構成、顕著な特徴、証拠と実施の側面を解説する。

子育て:子どもの行動と感情的な問題の予防と取り扱いの重要性

子どもの行動と情緒の問題の予防と治療の両方で、子育てを強化するための介入は、しばしば主要であるか少なくとも不可欠である (Prinz & Jones, 2003)。子育てにおける論点は、少なくとも 3 つの要素がある。第一に、子育てと家族の要因はしばしば子ども達の問題の悪化か継続をもたらす。第二に、子育てに関して介入することによって、治療者（または

きる治療者に変える。そして第三に、子どもたちの行動と情緒の問題のための、より成功した介入プログラムの多くは、子育てという要素を含んでいる。プログラムはしばしば、行動の問題、ADHD（注意欠陥多動性障害）、幼児期落ち込み、不安問題、友人関係、学業および学校の問題と他の社会的、感情的な問題に関連する困難をもつ親を支援することを目的とする。たとえこれらが診断がつくような障害という状況ではないとしても、子育て介入はまた、食事時間または寝る時間の問題というような一般的な子どものしつけの問題を扱うことに役立てられる。

従来の子育て介入のサービスにある限界

子育てに焦点を当てた介入を展開するその分野の進歩にもかかわらず、従来のサービスモデルには多くの限界がある。例えば、大部分の子育てプログラムは通常ある1つの方法（例えば親のグループ）の中だけでしか利用できず、一つの一定の期間（例えば、12-15のセッションの範囲内）があり、ある特別な場所（例えばクリニック、学校、コミュニティ・センター）に設定される。多くの育児プログラムは、両親自身が認識した子どものしつけの問題のために実際的な問題解決の方策に焦点を当てることよりも、むしろ実際の子育ての抽象的な原則を教えようとする。子育てプログラムは、一つあるいはおそらく二つの子どもの精神的な発達段階でしばしば設定される。最後に、大部分の子育て介入は評価されておらず、したがって、証拠に基づいていない。そして、それは品質保証のために何らかの責任があることを期待している消費者に公平でない。

医師は、柔軟に提供できる枠組みの子育てプログラムを捜している。時々親は、子どもの

おねしょ、かんしゃくまたはお友達作りのような特定の問題のために短時間の相談を必要とする。子どもの問題がより挑戦的でひどかったり、または両親がより高いレベルの支援を必要としているため、両親はより集中的な相談を求めているかもしれない。また他の家族においては、グループで構成されたプログラムがぴったりするかもしれない。

指導者（プロクティショナー）と両親にとって最もすばらしく有効性のあるものとは、柔軟な枠組みを持ち、両親が容易に理解し実行できる実践的な問題解決の方策を提供し、さまざまな発達段階にまたがって適用できる一貫した意味深い原則に基づき、そして十分に評価された（すなわち、証拠に基づいた）プログラムのことである。

トリプルＰとは何か？

子育ての能力を大きく改善していくには、地域での健康の考え方が必要である。両親を支援し、力づけていくために家族の親しみやすい環境を作っていくという概念は、それが日々の生活で両親に影響を与える社会的環境を対象とする（マスメディア、主要な健康管理サービス、チャイルドケアと学校制度、宗教組織、worksites と政治的なシステムを含む）介入を要求する。トリプルＰ・前向き子育てプログラムは、子育てと家族支援について両親が利用できる包括的な複数のレベル・システムを確実にするための地域戦略として、サンダース教授とその同僚によって開発された。（サンダース（1999））プログラムは、知識、スキル、両親の自信を強化することにより子どもたちの深刻な行動上、感情上、発達上の問題を防ごうとする。出生から１６歳までの子どもたちの両親のために、強さを（表 1）の強弱に応じて 5 段階の介入を取り入れる。

どのように、それは作用するか？

図１はトリプルＰシステムのいろいろなレベルの強さと範囲を表す。レベル１（一般的な介入）は、興味を持つ全ての両親に特定の子育て法を示す。使い勝手のよい子育て情報（助言）シートとビデオテープのみならず、コーディネートされた媒体や電子メディア・印刷物等を使ってのプロモーションキャンペーンをとおして、子育てに関する役に立つ情報へのアクセスを提供する。このレベルの介入は、子育て資源のコミュニティの認識を強め、親がプログラムに参加することへの積極性を強め、一般的な行動と発達上の懸念への解答を示すことによって、楽観的な感覚を引き起こそうとする。

レベル２は程度の軽い問題行動のある子どもを持つ親に、早期に予測した発達上のガイダンスを提供する１ないし２つのセッションによる、初段階での健康管理介入である。

レベル３（4回のセッション介入）は程度の軽いものから中くらいの行動困難な子どもたちを対象として、両親のために活発なスキルトレーニングを含む。レベル４はより深刻な問題行動のある子供たちのための集中的な８〜10のセッションで個人またはグループの子育てトレーニングプログラムである。そして、レベル５（レベル４と関連している）は家族の問題（例えば夫婦の対立、親の気分の落ち込みまたは高いレベルのストレス）という他の要素によって複雑化する子育て困難にある家族のための、質の高い行動家族介入プログラムである。

図１：トリプルＰと子育てと家族支援サービスの範囲と強さ

そして、複数のレベルの方策の理論的解釈は、機能障害と問題行動のレベルが子どもにおいて異なっているということと、親が必要とするかもしれない支援の方法に関して、タイプ、強さにおいて、さまざまなニーズと好みを持つということである。複数のレベルからなる方策は効率を最大限にし、コストを保持し、浪費と過剰サービスを避けるように考えられている。そしてコミュニティ内で幅広くプログラムがいきわたることを確実にしている。また、プログラムが多くの専門性にわたっている性質は、十分な子育てを促進する課題において、既存の専門家達をより良く利用されるようになる。

プログラムは、幼年期から青年期まで 5 つの異なる発達段階を対象とする。各発達段階内で、介入の範囲は非常に広い（全ての住民を対象としたり）もしくは非常に狭く（リスクの高い子どもたちだけを対象としたり）するなど変えることができる。この柔軟性によって、認定資格者は、彼ら自身のサービス・プライオリティーと資金をもって介入の範囲をどうしてゆくかを決定するのを可能になる。

トリプル P は何が他と違うか?

家族の介入としてのトリプル P には、下記で議論されるように他にもいくつかの特徴がある。

プログラム充足性の原則。この概念は、独立して問題を管理するのを可能にすることを要求する介入の強さはそれぞれの親において異なることに言及している。トリプル P は、両